

令和新時代 兵庫の挑戦

兵庫県知事 井戸敏三



震災から25年

1月17日に震災から25年を迎えました。秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席の下、県公館とHAT神戸において追悼式典を行いました。小・中・高校生の言葉と「しあわせ運べるように」の歌声に、明日への決意を共有しました。

長いようで、瞬く間のよう感じた25年。成熟社会を見据えた創造的復興を目指してきました。この経

験と教訓は、国内外の被災地の復興に活かされています。

必要なことは、過去から学び、未来につなぐことです。風化が懸念されている今だからこそ、この原点に立ち返り、経験と教訓を「忘れない、伝える、活かす、備える」の下、次なる時代への安全を期さなければなりません。

南海トラフ地震が間近に迫っています。国難となり得る大災害を前に、兵庫がわが国の防災モデルとなるべく、災害文化を定着

させ、安全安心の基盤を確立します。

本格的な令和時代の始まり

令和2年は本格的な令和時代の始まりといえます。平成時代は経済的な停滞が長く続き、少子高齢化が深刻化し、自然災害が多発した時代でした。

一方、グローバル化、AI（人工知能）などによる情報社会化、ITベンチャーの成長などが進展しました。第4次産業革命とい

われるこれらの技術革新は、さらに驚くべき速さで進化を続け、私たちに希望を与えています。

こうした技術を大きく育て、平成から引き継いだ課題の解決に挑み、次なる時代をつくり上げていかなければなりません。

先行きへの懸念

しかし、先行きに懸念がないわけではありません。

一つは、経済情勢です。新型コロナウイルス感染症

症の広がりや長期化により、観光業や部品供給網の途絶などさまざまな分野への影響が懸念されます。

米中貿易摩擦や英国のEU離脱の影響など海外発のリスクにも留意しなければなりません。

二つは、社会のゆがみです。人口の一極集中だけでなく、地域内の格差も目立っています。先進国唯一の中央集権がもたらす依存主義、また、経済至上主義や行き過ぎた個人主義が、格差の固定化や地域とのつながりを希薄化させています。

三つは、気候変動です。昨年の世界の平均気温は観測史上2番目の高さとなりました。頻発・激甚化する自然災害の一因とも考えられ、温室効果ガスの削減は世界共通の喫緊の課題です。暖冬による雪不足も、自然災害ともいえるのでしょう。

地域創生の新展開

そして、最大の課題は人口減少対策です。昨年の日本人の転出超過数は千人余り拡大し、7260人となりました。東京、大阪への転出が広がっています。出生数も4万人を割って3万8658人となり、近い将来、高齢者数が現役世代の人数を上回る地域が出てくると予想されます。

しかも、地域偏在が拡大し、二極化しています。子育て世代などの人口流入により持続可能な地域と、人口流出により地域社会の存立が危ぶまれている地域が出てきました。県全体としての社会減をなくすこと、併せて、都市部以外の地域の活力を持続できるかどうかです。そのためには、広域的に

人を引き付けるプロジェクトを大胆に展開し、選ばれた地域として再生すること、AI、IoT（モノのインターネット）を地域に取り込み、どこにいても豊かな生活環境を整えること、そして、地域づくりの担い手を確保していけば、地域創生の活路は開くはず

です。「第二期兵庫県地域創生戦略」では、「地域の元気づくり」「社会増対策」、自然増対策として「子ども・子育て対策」「健康長寿対策」の四つの戦略目標を掲げています。

新たな時代を切り拓く挑戦

震災の復旧・復興による財政負担は、これまで長期にわたり、また、これからは10年は続いていきます。行財政構造改革を成し遂げた

とはいえ、依然として厳しい財政運営を強いられます。しかし、重要なことは、震災から25年を経過した今こそ、新しいステージにふさわしい県政を推進すること、そして、人口が減っても活力のある、住み続けたいと思える元気な兵庫をつくることです。

今こそ、新たな時代を切り拓く挑戦の時です。

求められているのは、「兵庫2030年の展望」で描いた「すこやか兵庫」の実現。暮らし、産業、地域の魅力、教育など、あらゆる分野の質を高めるための種をまき育てていく。大きく後れを取ってしまった社会資本整備やまちの再整備にも取り組まなければなりません。令和新時代の本格的なスタート。復興の先の新しいステージに向かって、大きく羽ばたこうではありませんか。